

Book Review 16-18 人物 #アーネスト・シャクルトン

『#シャクルトンの生涯』（ラヌルス・ファインズ著）を読んでみた。著者は南・北両極を巡る世界一周を成し遂げた探検家。川船やホバークラフト、手動のソリ、スノーモービル、スキーなどを操り、記録的な遠征を達成した冒険家で、極地探検家シャクルトンの足跡を辿った数少ない人物でもある。

アーネスト・シャクルトン (Ernest Henry Shackleton) が 1914 年頃に南極探検隊の募集広告（実際にこの広告が存在したかどうかは議論の余地あり、本書には書かれていない）で使用したとされる有名なフレーズを、30 年前に京都大学総合診療部の医局員を募集するときに、一部修正して用いた。

シャクルトンのフレーズは「求む男子。至難の旅。僅かな報酬、極寒、暗黒の続く日々、絶えざる危険。生還の保証なし。ただし、成功の暁には名誉と称讃を得る。」 (MEN WANTED for Hazardous Journey. Small wages, bitter cold, long months of complete darkness, constant danger, safe return doubtful. Honor and recognition in case of success. )

私が作ったフレーズは「至難の修練、僅かな報酬、研修の長い月日、絶えざる異端視、成功の保証なし。成功の暁には患者のための技能と患者からの称讃を得る。」（自虐的であるが、今も部屋にラミネートして飾ってある）。

本書は、シャクルトンのその生い立ちから 3 度目の遠征に向かう航海の途上で急逝するまでの行動と社会的背景、家族、恋愛と結婚、夫婦関係、成功と失敗、人間的弱点と強さ、活躍と挫折など、彼の知られざる人間像を描き出す。以前に出版されていた『エンデュアランス号漂流 (Endurance: Shackleton's Incredible Voyage) 』には、南極探検隊の募集広告も掲載されており、これは肯定的な視点でシャクルトンを描いた最初の本と言われている。こちらの本の方が、「エンデュアランス号」による遭難と帰還を中心に記述されており、読み物としては面白いかもしれない。

彼は南極遠征を 3 度挑戦し記録を作ったが、遠征目的は達成できず、失敗した（探検家としての評価は高くない）。

1 回目はスコット隊長の「ディスカバリー号」遠征に隊員として参加。スコットに従い極点制覇を目指す。失敗。シャクルトンは壊血病で衰弱しスコットに「役に立たない隊員」として帰還させられる。

2 回目はシャクルトン自身が隊長の「ニムロド号」遠征。ディスカバリー号遠

征から帰還して様々な職業に就くが、いずれもうまくいかない。他方で南極への憧れは抑えきれず、多方面に迷惑をかけながら大きな負債を抱え、再度南極へ出発する。しかしこの遠征も、極点までもう少しのところまで食糧不足と体力の限界で達成できなかった。

3回目は「エンデュアランス号」による「帝国南極探検隊」。夢を捨てきれず南極大陸横断を目指したが、南極へ向かう海路で心臓発作のため急逝した（遭難したのにリーダーシップを発揮して、全員帰還させたことが後々評価されるようになった）。

シャクルトンが探検家としての輝かしい業績は残せなかったが、最近では困難をどう切り抜け、挫折を乗り越えるかという観点からシャクルトンの業績が注目されている。2001年、『史上最強のリーダー シャクルトン (Shackleton's Way: Leadership Lessons from the Great Antarctic Explorer)』の中でシャクルトンが企業のリーダーのモデルとして取り上げられている。同書は「シャクルトンは今日のビジネス社会の幹部と重なるところがある。彼の人間中心のリーダーシップへのアプローチは管理職にとってのガイドとなる。」と述べている。英国のリーダーシップ研究所はシャクルトンに関する講座を設けた。ボストンでは、「旅が全て (The Journey is Everything)」というモットーを持つ「シャクルトン学校」が設立された。

歴史的成果よりも、その人物の行動そのものが評価されるような時代に移り変わっている。人物の評価は時代と共に移ろいゆく。今評価されなくともクヨクヨしないことが大事！